

アクセント史料として見た平曲譜本

奥村, 三雄

<https://doi.org/10.15017/2332767>

出版情報 : 文學研究. 69, pp.1-32, 1972-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

アクセント史料として見た平曲譜本

奥村三雄

目次

- 一、はじめに 一の一、資料
- 二、アクセント資料として見た各譜記の意味
- 三、譜記型式のユレとアクセント
- 四、譜本の種類と型のユレ 四の一、曲節の種類と型のユレ
- 五、いつ頃のアクセント資料か―その多様性
- 六、アクセント史料としての意義 六の一、漢語アクセント資料として 六の二、漢語のアクセント型分類表
- 七、参考資料―九大本『平語』の一部

一 はじめに

平曲の旋律とアクセントとの関係については既に、「平曲の音声(上・下)」(日本音声学会会報99・101)や、「前田流平曲メロディについて」(日本文学研究31)など、金田一春彦氏の諸論考があるし、また、平曲の諸譜本

アクセント史料として見た平曲譜本(奥村)

については、渥美かをる氏（文学昭28の2、日本文学研究31、愛知女子短大紀要1・3・4）や、岩淵悦太郎氏、（日本文学研究31）高橋貞一氏（国語と国文学昭33の7）等の御研究がある。しかし、当面の課題については、なお、未開拓の分野が、相当残されている様である。例えば、前者の場合、一々の譜本に関する分析的研究は、余り重点がおかれていない様であるし、後者は、アクセント資料という観点に重きがおかれていない。『国語と国文学』（昭45の10）の拙稿にひき続き、ここで、平曲諸譜本に反映したアクセントの問題を考えようとする所以である。

一の一 資料

資料としての平曲諸譜本や、作業の方法などに関しては、概ね、前記拙稿の場合に準ずるが、本稿の場合、主として用いる譜本は、下記の如くである。

(イ) 東京教育大学蔵片カナ八行本Ⅱ巻一の願立まで一二句に譜記がある。渥美かをる氏その他によれば、徳川初期の譜本であり、波多野・前田両流分派以前の姿を示すという。略号『**教育大学本**』または『**教**』。

(ロ) 貞享四年写本Ⅱ高橋貞一氏蔵。吉沢検校の調譜であり、「上」「中」などの文字式ハカセは皆無。全体としては謡曲のゴマ点に似ている。白声という曲節が稀である事など、古風な点が多い。略号『**貞享本**』または『**貞**』。

(ハ) 平家正節Ⅱ略号『**正節本**』。ここでは、東大本・京大本・九大本・愛知県立大本などをとり上げる。

東大本は岡正武写しの善本であり、金田一氏の論文でも、時々引用されている。本稿で、単に、『**東大本**』、『**東**』と略記するのはこれである。

京大本は『平曲正節』と表題されるが、いわゆる正節本の成立事情等を考えるのに有効な資料。出典付きの書き

こみ注記が豊富な事、しばしば、線条式（江戸式前田流）のハカセが並記されている事等も注目される。詳しくは、その複製本（昭46臨川書店）解題を参照の事。本稿で、単に、『京大本』『京』と略記するのはこれである。

九大本は『平語』と表題されるが、内容は正節本の一つ。尤も、これは一五巻上下の三〇冊で、東大本等の『読物』以下や付録の類は存しない。奥書識語等も認められない。本稿の終り（第七項）に参考例として掲げたのは、九大本（巻一上鱸）の一部分である。略号『九大本』。

(二) 京大蔵波多野流本Ⅱ二巻上下で二四冊。白声にも若干譜記が認められる点、他の波多野流諸本とやや異っている。略号『波多野流本』または『波』。

二 アクセント資料として見た各譜記の意味

(一) 結論を先に言えば、やや常識的ながら、やはり、△平曲諸譜本は、中世末期～近世初期頃のアクセント資料として、いろいろ有意義△という事になるうか。「平曲旋律の中、アクセントとして使い得るのは主に白声の部分」という様な説（国語学71集3、前田富祺氏等）もあるが、平曲諸譜本の譜記は、白声や口説の部分のみならず、その多くが、何らかの意味で、重要なアクセント資料となる。

(二) 例えば、東大本平家正節における二拍名詞「足^{アソ}」の譜記をみると、曲節によって、下記①～④の如き諸型式が認められるが、それらいずれも、当時のアクセント型「●○」を反映している様である。

(注) 本稿のアクセント表記において、●は高い音を示し、○は低い音を示す。また、下記諸項における▼や▽は助詞の高低

アクセント史料として見た平曲譜本（奥村）

を示す。

②上×₁₁二魁・14上₁₁白、六代・10下₁₀口 ③上ア₁₁弓流・7下₈₉拾、奈良炎上・炎上₅₆下音 ④ウア₁₁
逆槽・5下₁₂₂中音 ⑤×₁₁足摺・2上₈₁初 ⑥₁₁ハ₁₁千寿・5下₁₀₄初中 ⑦₁₁ハ₁₁木曾山門・読下₂₁散

(注) 本稿の場合、各用例については、「句の題名、巻数、ページ数、曲節名略記」を、それぞれ右記の順序で示した。曲節名の白声・口説・指声・折声・初重・初重中音・三重甲などは、それぞれ、「白・口・指・折・初・初中・三甲」の如く略記する。

なお、下記諸項の用例では、巻数の前に、「波・教・東・京」等、テキスト名を略記した場合がある。

(3) アクセント資料として見た場合、諸譜本の表記が、それぞれ、いかなる意味をもつかという事は、原則として、各各譜本に関する綿密な帰納的作業₁₁に基かざるを得ないが、また一方、₁₁現行平曲の旋律や、『平語偶談』の如き平曲伝書の記述₁₁なども、非常に参考となる。更に、そこから推定されたアクセント型に関し、₁₁補忘記はじめ、ほぼ平曲と前後する頃の各種アクセント資料₁₁を、大いに参照すべき事など、言をまつまい。なお、これらの作業方法については、前記金田一春彦氏の諸論考を参照の事。

ここでは、その結果だけを、かたんに示しておこう。

(3・1) 無記号の部分や、「上」のあとの「・」などは、基音を示す。本稿ではそれらをすべて×で表記した。

尤も、参考例（下記第七項）の「かたへの」（9行め）「是は」（9〜10行）など、或文節全体が無記号である様な場合は、むしろ、語アクセントが反映していない例と見なされる。

(3・2) 正節本の白声・口説における『上』『上』及び、その他の曲節における『ハ』や『ウ』などは、いずれも基音より高い音を示す。音楽的旋律としては、それぞれ異った性格のものであるが、アクセント資料としては、等しく高音部を示すと見なされるのである。

例えば、参考例（下記第七項）の「明石^{アカシ}」上×××（口説1行）や、「いかに^{イカニ}」上×××（同）等は、●○○型表記と見られる。

尤も、参考例の「頓^{ヤガ}で^{ヤガ}」ハ×××（指声4行）など、ハの高まりは、その後の無記号部にも及ぶらしい。現に、この例も、東大本（1上5）では「上上上」型表記をとるし、波多野流本（1上32）では「／／／」の如く表記される。

なお、下記は、いずれも、参考例（下記第七項）による比較であるが、これによって、△ハは●○型であり、ハは●型である事を知り得よう。

- ④ 明石^{アカシ}ハ××（上歌2行）ハ上××（口説1行）
⑤ 忠盛^{タケモリ}ハハウハカ（下ケ1行）ハ上上××（口説6行）
③・③ 『ハ』や『シ』は一般に、基音より低い音を示す。

なお、参考例の「浦風^{ウラカゼ}」×××××（上歌2行）など、シの低まりは、その後の無記号部に及ぶ事がないらしい。現に、この例も、波多野流本（1上32）では、「一一／」の如く表記されている。

(3・4) 指声や折声の『中』は、「上」より低い音を示す。下記の比較例などは、その事情を物語っている様

②局^{ツボネ} // 一× (波1上33口) // 上_コ上× (参考例8行) ③通はれ^{カヨ} // 一× (波同右) // 上_コ上× (参考例7行)

これに対し、波多野流本の指声等における「一/」は、下記の如く、○●型の反映と考えられる。

④御感^{ギョカン} // 一/ (波1上32指) // 中上上 (参考例4行) ⑤有明^{アリアカ} // 一/ (波1上32下ケ) // √_ハ×× (参考例2行)

(3・82) 教育大本の口説における「中」と「上」の関係なども、概ね右に準ずる。例えば、下記②③及び④の如き対比例からしても、『上中』は●型、『中上』は○●型と見なされるのである。

②局^{ツボネ} // 上中× (教15口) // 上_コ上× (参考例8行) ⑤通はれ // 上上中× (教15口) // 上_コ上× (参考例7行)

③最愛^{サイアイ} // 中上×× (教15口) // ×上×× (参考例6行)

(3・9) つまりは、一層綿密な帰納作業が要求されるわけであるが、また一方、このような場合は、現行平曲の旋律に関する検討等も有効であろう。

(4) その意味においても、金田一春彦氏の諸論考(音声学会会報101号や、日本文学研究31等)は、極めて貴重である。本稿の場合は、概ね、各譜本に関する帰納法によっており、現行平曲の音楽的旋律等を考慮する所は少なかったが、氏の御研究では、その点も充分検討されているのである。

(5) その他、平語偶談(文政10藤井雪堂著)には、波多野流関係の譜記について説明があるし、また、平家音楽史(明治43館山漸之進著)には、平家吟譜や平家正節に関する節ハカセの説明がある。

三 譜記型式のユレとアクセント

(1) アクセント史料として見た場合、平曲譜本は、他の諸文献に比し、量的に尠大なものである為、かなりの巾が認められる。

(2) 例えば、下記(3)項以下一の如く、 \wedge 同一語が、同一譜本の同一曲節中で、二つ以上の型に表記される \searrow という様な場合も、かなり存する。しかし、それらはそれなりに、やはり、当時におけるアクセントの実態を、如実に反映していると考えられる。

(3) その一例—平板化傾向

(3・1) さし当っては、下記〔 $\blacktriangle \bullet \bullet \bullet \sim \bullet \bullet \bullet \bullet$ 〕の傾向など、注目すべきであろう。いずれも、教育大学本における口説の例である。

④ 暇^{イトマ} || 上中 × (妓王79) || 上上中 (妓王68) ⑤ 仏^{ホトケ} || 上中 × (妓王64) || 上上上 (妓王81) ⑥ 所^{トコロ} || 上中 × (殿上8)

|| 上上中 (二代39) ⑦ 仰^{オホセ} || 中中 × (二代35) || 上上中 (殿下96) ⑧ 草木^{クサキ} || 上中 × (禿21) || 上上中 (清水49)

(3・2) しかして、これらは、いずれも、偶然的な型のユレや、旋律的特徴の然らしむる所でなく、当時におけるアクセント変化の姿を反映しているものと見なされる。

(3・2 1) 現に、暇^{イトマ}や仏^{ホトケ}の場合は、現在京都語など、甲種系諸方言で $\bullet \bullet \bullet$ 型をとる事が多いが、名義抄や四座講式では $\circ \circ \circ$ 型に表記される。そこには、〔 $\circ \circ \circ \downarrow \bullet \bullet \bullet \downarrow \bullet \bullet \bullet$ 〕の様な変化が想定されるわけであり、前記教育大学本の表記例は、その第二段階の変化を反映していると考えられる。因みに、暇^{イトマ}は、補忘記でも \bullet

●型に表記されている。

(3・22) 所も、現在京都語等諸方言から見ると一類相当語であるが、『四座講式の研究』346ページによれば、鎌倉期には、●○型と●●型とが並存していたらしい。前記教育大学本も、その並存状態を反映しているであろう。

(注) 本稿の場合、「三拍名詞一類」などの「類」については、『国語学辞典』94ページのアクセント型分類語彙表に準ずる。下記諸項において、「三拍名詞頭類」などと称する場合も、これに準ずる。

(3・3) 仰・草木などの●●型は、暇の如き場合と異なり、必ずしも安定しなかつた様であるが、それらが○○型出自である点、一おう注目される。それら教育大本の平板化例は、結局、下記(4)(4・1)の如き、公助詞「ノ」の接続形や、複合語形等の平板化傾向と関係するのであろうか。

(4) 平曲譜本の場合、二拍三類名詞や、三拍四類名詞等に助詞「ノ」の付いた形は、その殆んど(九割以上)が、●●型や●●●型となるのである。以下は東大本の例。

①明日^ア上^ス×(医師・9上83口) || 上上(三章・9下84口)の^レ ②家^イ上^ス×(禿・8上11口) || 上上(還御・1上77口)の^レ ③扇^ア上^ス上^ス×(那須・1下75口) || 上上上(那須・1下85口)の^レ ④敵^カ上^ス上^ス×(那須・1下80口) || 上上上(老馬・4下61口)の^レ

(4・1) 下記④の如き複合語形の平板化傾向については詳述を要するまい。これは、平曲に限らず、名義抄

アクセント史料として見た平曲譜本(奥村)

あたりでも、かなり認められた所である。以下は参考資料（下記第七項）の例である。

①月^{ツキ}上×（口8行）〜月影^{カゲ}上^コ上^コ××（口10行）

②女房^{ニヨウバウ}上^コ上^コ×××（口8行）〜女房達^{タチ}上^コ上^コ上^コ××

（口9行）

四 譜本の種類と型のユレ

(1) ≪平曲譜本に反映したアクセントの多様性≫と言えば、下記の如き、譜本や曲節の種類によるユレも、いろいろ認められるが、それらもやはり、単なる譜記のユレでなく、何らかの意味で、当時におけるアクセント変化の実態を反映している場合が多い様である。

(2) テキストの問題としては、さし当り、教育大学本の古さという事が注目されようか。下記(1)〜(2)はその徴である。

(1) 二拍二類名詞+助詞「ノ」の形―東大本では、或程度、平板化型が認められるが、教育大本にはそれがなく、「ノ」接続形に関する限り、「二類●○／三類●●」という対立が厳存している。下記は、口説の部分における、その比較例である。

人^{ヒト}の^ノ上^コ上^コ上^コ（医師・東9上83）^ノ上^コ××（清水・教53）

東大本の平板化型は、おそらく、三類+「ノ」の形（下記(2)）に類推されたものであろう。

(2) 二拍三類名詞+助詞「ノ」の形―東大本では、概ね、「ノ」が高く付いて、●●▼型をとるが、教育大本

では、新しい●●▼型と、より伝統的な●●▽型とがほぼ相半ばする。従って、下記の如く、「東大本●●▼／教育大本●●▽」という対立が、しばしば認められるのである。

④家の^イ上上上(還御・東1上79白) 上中×(鱸・教20) ⑤雲の^{クモ}上上上^コ上(殿上・東2上5口) 上上上×(殿上・教3)

しかしして、この「家の」類は、四座講式その他で○○▽型になっているのであるから、当然、教育大本の●●▽型が、伝統的型式という事になるわけである。

い) 二拍二類動詞+助詞「テ」の形—教育大本では、概ね伝統的な○○●▼(または○○●▽)型表記であるが、東大本では、新しい○○●▽型が多い。僅かに存する○○●▼型は「取つて・読うで」等の音便形に限られる。

なお、この様な対立の意味については問題も残るが、いずれにしても、△○○●▽型が、書紀古写本等になく、訓点抄あたりから認められるものである。以下は、非音便形に関するその比較例である。

教育大本の例 ④兼ねて^イ上中上(妓王・77口) ⑤成りて^イ中中上(二代・41口)

東大本の例 ④過ぎて^イ上上上(逆櫓・5下142口) ⑤取りて^イ上上上(小督・4上106指)

(二) 低起型の記法—教育大本は、下記の如く、東大本に比し早上り型が多い。いずれも口説の例である。

⑥^ア尼に^ア上上上(妓王・教93) 上上上(同・東11上90) ⑦相かなはず^イ上上中上上(清水・教56) 上上上

上上(同・東炎上34) ⑧打ち平らげ^イ上上上上上(鱸・教17) 上上上上上(同・東1上10)

やや事情は異なるが、下記の如き、参考資料(第七項)の譜記と教育大本のそれとの対立なども、注目すべきであらう。

① いづく || × × 上 (口10行) || × 中上 (教15) ② とり忘れ || × × 上上 × (口8行) || × 中上上 × (教15)

平曲譜本における早上り型と遅上り型との並存状態はかなり複雑であるが、金田一春彦氏(日本音声学会会報10など)によれば、この「早上り型→遅上り型」の変化は、補忘記く平曲譜本の頃に起ったものであるという。

(6) その他、一々の語彙の型表記に関しても、教育大本の古さは、しばしば認められる所。例えば、下記に関しても、教育大本は、正節本等より、古い姿を示していると考えられる。

覚束なし || 上上上上中 × (教15) || 上上上上 × × (参考例・口10行) || 正節本諸種や波多野流本等も、概ね、参考例と同様 ●●●●○○型。

(3) 貞享本の性格も、下記(4)(5)の如く、或程度、前記教育大本の場合に準ずる。

(4) 二拍三類名詞+助詞「ノ」の形→正節本に比し、次の様な ●●▽型表記が多い。

① 草クサの || / < (忠度・34口) ② 雲クモの || / < (福原落・67口) ③ 山ヤマの || / < (火打・8口)

(5) 低起型の記法→正節本に比し、下記の如き早上り型の例が多い。

④ 御ミコびわ || / < (青山・51口) ⑤ 稻津イナヅ || / < (火打・2口) ⑥ 立ちよらせ || / < (忠度・28口)

(4) また、波多野流本(京大蔵)の場合は、下記(4)~(5)の如く、平家正節よりも一層新しい性格を示すようである。

(4) 二拍四類名詞+助詞「ノ」の形→正節本では概ね、伝統的な ○●▽型をとるが、波多野流本では、新しい ○●▽ (または○○▽) 型が、かなり認められる。この場合、○●▽型を伝統的型式と見なす事については、『四

座講式の研究』438 ペ等参照。下記は東大本や京大本との比較例である。

④海^{ウミ}の $\parallel \times \times$ 上 \times (那須・京192口) \parallel \parallel / (有王・波3上134下り) ⑥舟^{フネ}の $\parallel \times \times$ 上 \times (那須・京187口) \parallel ウア

(竹生鳥・東1下8初中) \parallel 「 \parallel / (小宰相・波9下23) ③松^{マツ}の $\parallel \times \times$ 上 \times (法住寺・京1369口) \parallel \parallel / (海道下・東1

下56初) $\parallel \times \times$ / (僧都死去・波3上147口) \parallel / (老馬・波9下23中音)

(四) 二拍二類名詞+助詞「 \parallel 」の形—前述の如く、正節本でも、或程度平板化型が認められるが、波多野流本の場合は、一層それが著しい様である。例えば、「鞍^{クラ}の・雪^{ユキ}の」等は概ね●●▼型に表記されるし、「川^{カハ}の・人^{ヒト}の・胸^{ムネ}の」等は、●●▽型表記の例がかなり多い。

(イ) 低起型の記法—波多野流本は、下記(A)~(C)の如く、正節本よりも更に、遅上り式が著しい。

(A) 口説の部分における比較例。

①御前^{ゴゼン} $\parallel \times$ 上 \times 上 (殿上・東2上27) $\parallel \times \times$ / (同・波1上18) ②さし出す^{イダ} $\parallel \times$ 上 \times 上 $\times \times \times$ (二代・東4上5) $\parallel \times$

\times / $\times \times$ (同・波1上120)

(B) なお、下記の①~③の如きは、東大本も遅上り型になっているわけであるが、しかし、波多野流本の遅上り型とは異質である。同じく遅上り型と言っても、波多野流本の方が、一層新しいアクセントを反映していると見なされる。

③常盤^{トキハ}が $\parallel \times \times$ 上 \times 上 (我身・東7上18口) $\parallel \times \times \times$ / (同・波1上51口) ④出家^{シユツケ}の $\parallel \times \times$ 上 \times 上 (禿・東8上4口)

$\parallel \times \times \times$ / (同・波1上34口) ⑤内侍^{ナイシ}が $\parallel \times \times$ 上 \times 上 (我身・東7上17口) $\parallel \times \times \times$ / (同・波1上51口)

右に關し、公平曲譜本では、現在京都語の○○○●型と異り、まだ○○○●●型の段階 \searrow とする説もあるが、波多野流本などでは、既に、○○○●●型の例も、相当認められるわけである。

アクセント史料として見た平曲譜本(奥村)

型をとるが、白声には、下記の如き●●▼型が相当認められる。

②橋はしの||上上上(橋合戦・東8上103白) ③雪ユキの||上上上(老馬・京4102白)

(イ) 二拍三類名詞+助詞「ノ」の形—正節本の場合、白声以外の曲節では、伝統的な●●▼型が或程度認められるが、白声では殆んど●●▼型となる。下記は、京大本における白声と口説との対照例である。

④家の||上上上(還御・132白) ||上上上(鱸・17口) ⑤波なみの||上上上(山門御幸・685白、三日平氏・1542白、同・1545白) ||上上上(緒環・573口、逆櫓・511口)

(ニ) 低起型の記法—正節本の場合、白声では、殆んどが新しい遅上り型をとるが、白声以外の曲節ではいずれも、早上り型がかなり認められる。

この問題に関し、△口説や白声・拾の類はいずれも、指声・中音・初重などと異り、新時代の日常語が影響して、概ね遅上り式をとる▽とする説(『音声学会会報』101金田一氏)もあるが、少くとも、△白声▽と△口説・拾▽との間には、一線を画すべきものの様である。下記は、東大本における白声と口説との比較例である。

⑥見え給ふ||××上××(無文・1上53白) ||×上_コ上××(無文・1上55口) ⑦打ち入れ||××上×(宇治川・3下49白) ||×上_コ上×(那須・1下85口) ⑧成り給ひ||××上××(平大納言・3下101白) ||×上_コ上××(那須・1下72口)

(2) 白声以外でも、口説や拾・上音の類は、指声・初重・三重・中音などに比し、或程度新しい要素が認められる。

(イ) 先ず、低起型の記法に関するそれらの違いについては、既に、金田一春彦氏(『音声学会会報』101号その他)

の説かれた所であるが、要するに、指声・初重・三重・中音などでは、概ね早上り型をとるに對し、口説・拾・上音・下音などでは、早上り・遅上り兩型が並存している。

下記は、參考資料(第七項)における、口説(㉔)とその他(㉕㉖)との對立例である。

㉔ いづく || × × 上 (口10行) ㉕ とり忘れ || × × 上 上 × (口8行)

㉖ 御感 || 中 上 上 (指4行) ㉗ 有明 || √ / × × × (下ケ2行)

更に、東大本を例として、同一語における兩型の對立を考えてみよう。

㉘ 父を || 〱 / × × (願立・11上13初中) || × × 上 (浜軍・7下43拾) ㉙ 舟に || 中 上 上 (熊野・4下80指) || × × 上

(鱸・1上17口) ㉚ 読むで || √ / × × (小督・4上103下ケ) || × × 上 (都還・3上42口)

(㉛) 二拍二類名詞+助詞「ノ」―正節本の場合、口説では、次の様な●●▼型が若干存する(勿論、白声の場合ほど多くはない)が、その他の曲節では、殆んどが伝統的な●○▽型をとる。

㉜ 鞍の || 上 上 上 (重衡・京1489口) ㉝ 人の || 上 上 上 (医師・東9上口)

(3) 尤も、この様な曲節による譜記の對立が、すべて、アクセント型の違いを反映するとは限らない。そこには、それぞれの旋律的特徴と見るべき場合もないとは言えないのである。

(3・1) 例えば、折声の類においては、次の様な●○●型がかなり認められ、それぞれ、白声・口説などの●○型に對應する。以下は東大本の例である。

㉞ 哀れ || 上 上 (維盛入水・7下64折) || 上 × × (判官都落・5下163白、逆櫓・5下125口) ㉟ 有りし || 上 中 上

(新大納言被流・6上46折) || コ 上 × × (信連・4上82口)

(3・11) これらの●○○型は、一見、「○○○↓○○○」というアクセント変化の過渡的段階を示す様であるが、実際問題として、その可能性は大きくない。むしろ、それらは、中世的アクセントの反映という様なものでなく、単なる旋律的特徴と見るのが妥当であろう。すなわち、折声の類では、一般に●○○型表記が稀であり、もともと●○○型だったものもすべて、下記①②の如く●○○型表記をとるからである。

① 功德ケドク || 上中上 (竹生島・1下10折) || 上入 (呉音) ② 主君シユクン || 上中上 (土佐坊・1下121折) || 上平 (漢音)

(注) この場合、功德ケドクが呉音語である事は問題がなからう。主君シユクンを漢音語と見なした理由は、いわゆる濁音語の「君」が清音になっっているからである。なお、これら漢語アクセントの出自については、後述第六の二項(2・3)〜(2・34)を参照の事。

五 いつ頃のアクセントを反映するか―その多様性

(1) 平曲譜本に反映したアクセントの多様性―巨視的には一おう、補忘記などの類と同様、中世末〜近世期頃の京都アクセントを基盤とするもの様であるが、それ以上詳細にわたるといろいろ難しい。もともと、文献資料を、音声言語史の流れにおけるどこかの一断面に据えようと試みた場合、各文献は、しばしば質的不均一性を示すが、平曲謡曲などの語り物資料では、それが特に著しいと言えようか。

(2) 例えば、△平曲―特に白声・口説・拾などの旋律は、補忘記よりもやや新しい時代のアクセントを反映している▽とする説が有力であるが、また一方、平曲譜本類には、下記(イ)〜(ロ)の如く、補忘記より古い姿を反映し

ているらしい面も、しばしば認められる。『国語と国文学』（昭45の10）拙稿を参照の事。

(イ) 二拍四類名詞＋助詞「ノ」の形（松ノ類）における「○●●▽↓○●●▼」（または○○●▼）の傾向は、平曲譜本よりも補忘記において著しい。

平曲―特に前田流譜本では、テキストや曲節の如何にかかわらず、概ね、伝統的な○●●▽型をとる。△正節本の口説などにおいてさえ、常に○●●▽型をとる▽事、前述―第四項（4）の（イ）の如くである。より古い教育大本や貞享本等の場合、下記①②の如く、○●●▽型に表記されるのは、当然の事と言えようか。

① 海の〓／×（宇佐・貞67口） ② 上の〓中上×（鹿谷・教112口） ③ 父の〓中上×（清水・教52口）

前田流譜本における○●●▼（または○○●▼）型の例は、「城の〓××上（富士川・東8上159口、同160口）」をはじめ、「僧の・陣の・後家の・護持の」等々、漢語の場合に限られるのである。

これに対し、補忘記では、和語の場合も、○●●▽型〓今の・上の等〓と、○●●▼型〓今の・奥の・何の等〓とが並存している。「今の」については、貞享版上巻伊の部では○●●▽型に表記されるが、下巻の実例では、○●●▼型（9ウ）の表記も或程度認められる。

而してこの場合、○●●▽型が、四座講式等と一致する古型であり、○●●▼（または○○●▼）型が、新しい京都語の姿と一致するものである事は、詳述を要するまい。後者は、△「今ヲ・今ガ」等の○●●▼（または○○●▼）型に影響されて成立した近代語形▽と見なされる。

(ロ) 助詞「ノ」に関する保守性と言えば、一拍三類名詞＋助詞「ノ」の形（手ノ類）における「○●▽↓○●▼」の傾向も、事情はほぼ同様である。

補忘記では、「火^ヒの物^{モノ}||角^{カク}徴^{テイ}々々々」「檜^{ヒノ}の尾^ビ||角^{カク}徴^{テイ}角^{カク}」など、すべて○▼型をとるが、平曲譜本では、下記のように、いずれも●▽型になっている。以下は東大本の例である。

- ㉑ 木の葉^{コノハ}||上^{ウヘ}××(卒都婆・1上24口) ㉒ 木の下^{キノ}||上^{ウヘ}×××(競・7上128口) ㉓ 田^タの浦^{ウラ}||上^{ウヘ}×××(土佐坊・1下96口) ㉔ 目の前^{メノ}||上^{ウヘ}上^{ウヘ}××(能登最期・8下106白)

而して、「手^テノ」類は、四座講式で○▽型をとる故、平曲の●▽型が伝統的型式と見なされるのである。補忘記の姿は、やはり、「手ガ・手ヲ」等の○▼型に影響された近代語形であろう。

(イ) また、平曲―特に前田流譜本では、前述第四項(4)の(二)の如く、付属語や複合語(またはそれに準ずる形)後部要素の卓立型が著しい。白声においても、次の様な例が、かなり認められるのである。

- ㉕ 押し開け||上^{ウヘ}×上^{ウヘ}×(小督・東4上134白) ㉖ 洗はせなんど||上^{ウヘ}上^{ウヘ}×上^{ウヘ}×(千寿・東5下87白)

これに対し、補忘記では、この様な卓立型が殆んど認められないのみならず、更に、下記㉗㉘㉙の如き二文節的な形においても、従属型がめだつのである。

- ㉗ 利^トき端^{ハシ}||徴^{テイ}角^{カク}々々々 ㉘ 悟^{ハシ}れる者||徴^{テイ}々々々々々々 ㉙ 物を焼く||徴^{テイ}角^{カク}々々々々 ㉚ 刀を切らず||徴^{テイ}々々々々々々々々 ㉛ 血をもて血を洗ふ||徴^{テイ}々々々々々々々々々々(貞享本) ||徴^{テイ}々々々々徴^{テイ}々々々々(元禄本) ㉜ 限るといはば||徴^{テイ}角^{カク}々々々々々々々々

もともと、この様な現象については、新古の關係のみならず、場面的な關係等も考えられていろいろ難しいが、概括的には一おう、△時代と共に卓立型が減少してきた△と言えよう。

前記平曲譜本の卓立型に關しても、各曲節の旋律的特性と見なすべき場合が、或程度ありそうであるが、しか

し、それらの全部を、アクセントと無関係な旋律的特徴と見る事はできない。△比較的新しい性格の波多野流本では卓立型が少い△という、前述第四項(4)の(二)の事実など、よく考え合わすべきであろう。

(二) その他、下記(A)~(C)の如きも、やや語彙的問題ながら、補忘記より平曲譜本の方が古いアクセントを反映している例と言えようか。

(A) 上^{ウヘ}補忘記では、専ら●型が認められて、現在京都語等甲種系諸方言と一致するが、平曲諸譜本では、概ね下記^{ウヘ}の如く、伝統的な●○型をとっている。

① 上は^{ウヘ}中××(殿上・教12) ② 上に^{ウヘ}コ上××(物怪・京1057口)

(B) 暇^{イトマ}補忘記では、専ら●●●型に表記されていて現在京都語と一致するが、平曲譜本では、前述第三項(3・1)の如く、伝統的な●●○型と新しい●●●型とが並存している。

(C) 緑^{キナドリ}補忘記では、伝統的な●●○型と、新しい○○○型とが並存しているが、平曲諸譜本における○○○型は、ちよつと認められそうにない。

(3) 尤も、一般的なアクセント変化の傾向性として見れば、前記暇^{イトマ}等の類の〔●●○↓●●●〕や、緑^{キナドリ}等における〔●●○↓○○●○〕の現象は、平曲譜本においても、或程度認められる。しかし、いずれにしてもこの場合、△平曲譜本に認められるアクセント変化の〔●●○↓●●●〕〔●●○↓○○●○〕などが、補忘記でも既に認められ、語によっては、補忘記の方が新しい型式を示している△という点、注目すべきであろう。

(3・1) 例えば、「暇^{イトマ}」などの類の平板化現象は、前述第三項(3)以下の如く、平曲譜本においても或程度認められるが、補忘記の場合ほど著しくない様である。

(3・11) すなわち、平曲譜本における平板化現象は概ね、助詞「ノ」の接続した場合であり、その他の形に
関する平板化傾向は、それ程著しくなかったわけである。少くとも、二拍語の例はごく稀であるし、三拍語につ
いても、せいぜい前述「ホトケ仏」等若干の例を拾い得る程度である。

(3・12) それに対し、補忘記では、「ノ」接続形以外の平板型化が著しい。「オドロ藪・オノレトボツ己・アラン戸」イトマ嵐・オツ暇・オツ恐れ
・憎み(元禄本)・ホリケ堀池」等、三拍名詞二・四類(またはそれに準ずるもの)の語には、補忘記で「オツ徴々々」(●●
●)型表記をとるものが、相当多いのである。

(3・13) ここで特に注目すべきは、漢語のアクセントである。補忘記の場合、「オツ易断」(上巻)など、入平+
入入型出自の漢語は、後統語の如何にかかわらず、概ね「オツ徴々」型のハカセが付され、入〇〇〇〇↓●●〇〇↓●●
●)の変化が想定される。下記(イ)～(ニ)は、それぞれ、二字三拍漢語の平板化例であるが、三拍語以外の場合も、
事情はほぼ同様である。

- (イ) 平〔〇〕+平〔〇〇〕↓●●●||a) 易断(上巻) ①外道(上巻) ③歌詠(上巻) ④自性(下巻)
- (ロ) 平〔〇〕+入〔〇〇〕↓●●●||a) 意楽(上巻) ②下及(下巻) ③具足(下巻)
- (ハ) 平〔〇〇〕+平〔〇〕↓●●●||a) 等至(上巻) ①界会(上巻) ③論議(元禄)
- (ニ) 入〔〇〇〕+平〔〇〕↓●●●||a) 六字(上巻) ②六種(上巻) ③六喩(上巻) ④八喩(上巻) ⑤續
子(上巻)

なお、このような《出合》現象については詳述しないが、この場合、補忘記下巻における下記の記述は、一おう注目すべき
である。

「此教。余教。ト云ハハニ物ニ聞フル也……此教余教ト云ハハ、教ト余トニテ出合フ故ニ一物也」
桜井茂治氏「出合考」(国語研究7号)等参照。

(3・2) 一方、前記「緑」等のアクセント変化〔●●○↓○○〕についても、下記「二つ」の如き平曲譜本の例がないとは言えないが、しかし、何れにしても、この様な例は少い。

二つ^{フタ} || 上× (大臣流罪・東10上81口) × コ上× (那須・東1下77口)

三拍名詞二類及び四類の中、〔●●○↓○○〕の変化が想定される語群も、平曲譜本においては、次の様に、その大部分が、伝統的な○○型をとるのである。

③軍^{イクサ} || 上上× (富士川・東8上136口、同148白) ④袂^{タモト} || 上コ上× (卒都婆・東1上24口) ⑤磔^{ツツテ} || 上コ上× (鼓・東10下30口)

⑥渚^{ナギサ} || 上上× (弓流・東7下86白、同94白)

(3・21) 尤も、この○○型化の例は、補忘記においても多くは認められないが、しかし、この文献の場合は、平曲譜本ほど大部な資料でないという点など、よく考慮せねばなるまい。

(3・22) ともあれ、△緑^{キナドリ}などの語類における〔●●○↓○○〕の変化は、多くの場合、補忘記や平曲譜本あたり以前に完了していたとする説には、やや問題が残るのである。

(3・23) なお、平曲譜本で○○型をとっている「二つ」の場合は、特に、その変化が早かったらしく、金田一氏によれば、四座講式の永正本でも既に、角徴角〔○○〕表記の例が認められる。

また、平曲譜本の内部においても、若干のユレは避け難い。例えば、「軍」^{イクサ}に関しても、●●○型表記が圧倒的であるが、平家正節の或テキスト等、新しい譜本の白声や口説・拾の類においては、○○○表記の例も若干認められる。

アクセント史料として見た平曲譜本(奥村)

(4) 以上、△平曲諸譜本が、補忘記などよりも古いアクセントを反映している▽と考えられそうな現象を、敢えて列挙したわけである。更に、下記の如きは、何らかの意味で、△平曲譜本が、四座講式の或テキスト等より古いアクセントを反映している▽とも言えようか。

(イ) 後^{ノチ}△名義抄や四座講式大慈院本の○○○型に対し、四座講式文明本では●●●型が認められて、現在京都語と一致するが、平曲譜本では、概ね次の様に、伝統的な●●○型表記をとる。

上×(我身・教28) 中×(禿・教21)

(ロ) 朝^{アサ}△名義抄や大慈院本の○○○型に対し、四座講式正平本では●●●型が認められて、現在京都語と一致するが、平曲譜本では、下記の如くすべて、伝統的な●●○型表記をとる。

上上×(法印問答・東8上71白) 上^ト上×(競・東7上116口)

(ハ) △一つ△四座講式の場合、永正本等の○○○型に対し、寛正本・永禄本以下の諸本では●●○型が認められて、現在京都語と一致するが、平曲譜本では、下記の如く、伝統的な○○○型表記をとる。

中上×(妓王・教7792)

④『四座講式の研究』等を参照の事。

(4・1) 因みに、この(イ)(ロ)は、前述補忘記等の場合に準ずる平板化傾向の一種と見なされる。また、(ハ)は、前述補忘記等の○○○型化傾向の逆行現象と言えようか。結果的に見ると、数詞の一つ^{ヒト}「○○○→○○○」と、二^{フタ}つ「○○○→○○○」との間に、型の交替が行なわれたわけである。

(5) 平曲の新しいさー低起型の記法

(5・1) ここで、△平曲の譜本が、補忘記などより新しいアクセントを反映している▽と言えるのは、さし当

って、低起型の記法に関する問題であろうか。

金田一春彦氏説（国語と国文学昭35の10等）の如く、補忘記では、「中^{ナカ}に・背^セ中^{チウ}・隠^{カク}す」等の類がすべて、伝統的な早上り型（ $\bigcirc\bigcirc\bullet\bullet$ ）をとるに對し、平曲譜本の白声等では、 $\bigcirc\bigcirc\bullet\bullet$ の如き遅上り型が多い。そこには一おう、 $\bigcirc\bigcirc\bullet\bullet\downarrow\bigcirc\bigcirc\bullet\bullet$ というアクセント変化が想定されるのである。

(5・2)ただし、これも、或意味では、かなり相対的な問題と言えよう。公平曲譜本においても、そのテキストや曲節の種類等により、かなりの相違が認められる事、前述の如くなのである。ここでは、補忘記と平曲との差よりも、むしろ、平曲譜本自体におけるユレに注目すべきであろうか。

六 アクセント史料としての意義

(1) アクセント資料として見た平曲譜本の意義は、公中世末〜近世期頃における京都アクセントを如実に反映している事であるが、ここで注目すべきは、何といつても、その質量にわたる豊富さであろう。それは、いろんな面に関し、従来におけるアクセント史関係文献の質的量的不足を補い得るわけである。

(4) 例えば、三拍名詞「聖^{ヒツ}」の場合、名義抄には、上上平（観仏上7）と上上平（高3）との両型が認められ、大原孝道氏（『日本語のアクセント』56ペ）は、前者を採り上げていられるが、平曲譜本の×上×型（六代・東10下124目）その他からすれば、むしろ、後者をとり上げて、兜類^{カブト}所屬と見なすべきであろう。現在鹿兒島アクセントの姿なども、この考え方を支持する様である。

アクセント史料として見た平曲譜本（奥村）

(1) 「現」^{ウツ}の場合も同様であり、大原氏は、名義抄(観仏中81)の平平平型を採り上げられるが、平曲譜本の上××型(妓王・教88)などからすれば、むしろ、高山寺本(3)の平平上型をとり上げて、命類^{イナチ}所属と見るべきであろう。

(2) その他、ここでの詳述は避けるが、△平曲譜本により、アクセント型の明らかになる語彙▽中には、他の諸文献のアクセント表記が皆無だったものもかなり多い様である。

六の一 漢語アクセント資料として

(1) ここで特に注目されるのは、漢語アクセント資料としての意義であろう。

(2) 一般に、漢語アクセントの史的研究は、和語の場合に比し著しくおこなわれているが、これは、主として資料的な制約による。すなわち、個々の字音声調に関する文献資料はかなり存するが、話し言葉の中における実際の発音を示した漢語のアクセント資料は、一般に稀だったわけである。

(3) これに対し、平曲の場合は、△個々の字音声調という様なものにとらわれず、実際の漢語アクセントそのものを反映している▽点、極めて価値が高い。

(3・1) なお、補忘記の如き論議の類や、表白・祭文なども、一般に、有意義な漢語アクセント資料と言われているが、これは、平曲の場合と異り、字音声調の絆を、完全に脱し得ていない様である。また、補忘記などの漢語は、概ね、仏教界という特殊な言語生活の用語である点等も見逃せない所。

(3・2) そう言えば、平曲譜本の漢語アクセント表記は、下記第六の二項の如く、現在京都語アクセントとの間に、かなりはつきりした対応関係を示すが、補忘記等の場合は、それが少いのである。

六の二 漢語のアクセント型分類表

(1) とりあえず、平曲譜本一特に、教育大学本及び東大本一の表記を中心に、三拍漢語の若干に関するアクセント型の分類整理を試みると、下記の如くである。―表の説明は後述する―

(イ) 修行類―和語の形類に準ずる―平曲 ●●●型

① 五枚ゴマイ 上上コ上コ上コ (橋合戦 8 上108口) || コ00 || *b b* (呉) ② 修行シユギヤウ 上上コ上コ上コ (六代被斬 8 下126白) || コ00 A

B || *b b* (フエ) ③ 衆生シユツヤウ 上上コ上コ上コ (維盛入水 7 下76口) || コ001A || *b b* (サエ) ④ 不足フツク 上上コ上コ中 (鹿谷 118

口) || コ00A || *b b f* (フ) ⑤ 阿弥陀アマダ 上上コ上コ上コ (7 下136白) || コ00B || *b b b* (フエ) ⑥ 不思議フシギ 上上コ上コ中 (鹿谷出口) || コ00A || *b b b* (サ)

(ロ) 一度類―和語の小豆類及び頭類に準ずる―平曲 ●●○型

① 儀式ギシキ 上上コ中コ× (二代40口) || コ11B || *a d* (サ) ② 供養クヤウ 上上コ中コ× (殿上2口) || コ11B || *a a* (サ)

③ 気色ケンキ 上上コ上コ× (土佐坊1下112白) || コ11A || *a d* (サ) ④ 作法サホフ 上上コ中コ× (額打論46口) || コ11B || *a d*

(呉) ⑤ 子孫シソン 上上コ上コ× (六代10下110白) || コ11A || *a a* ⑥ 二歳ニサイ 上上コ中コ× (額打論44口) || コ11 || *a a*

(呉) ⑦ 一事イチジ 上上コ上コ× (法印8上79口) || コ22A || *d a* (呉) ⑧ 一度イチド 上上コ上コ× (法印8上83白) || コ23B

|| *d a* (呉) ⑨ 一夜イチヤ 上上コ上コ× (太宰府9下50口) || コ12A || *d a* (サ) ⑩ 権威ケンイ 上上コ上コ× (競7上100口) ||

コ11B || *a a* (漢) ⑪ 国土コクド 上上コ上コ× (禿21口) || コ11A || *d a* (呉) ⑫ 妻子サイシ 上上コ上コ× (維盛入水7下71白)

|| コ11B || *a a* (呉) ⑬ 上手ジャウズ 上上コ上コ× (鼓10下27白) || コ13B || *a a* (呉) ⑭ 浄土ジャウド 上上コ上コ× (妓王94口)

|| コ11A || *a a* (エ) ⑮ 冥加ミヤウガ 上上コ上コ× (維盛出家9下102口) || コ11B || *a a* (呉) ⑯ 礼儀レイギ 上上コ上コ×

アクセント史料として見た平曲譜本(奥村)

(大臣流10上61口) || コ13A || a a (漢) ⑨六位 || 上上 × (競7上105白) || コ22 || d a (吳) ⑩六字 || 上上 × (戒文8下78口) || コ22 || d a (吳)

い) 世間類 | 和語の二十才類及び命類に準ずる | 平曲 ○○○型

① 去年 || 中 × × (清水56口) || コ11A || b b a (漢) ⑥ 九月 || 上 × × (土佐坊1下100口) || コ11B || b d

② 九條 || 上 × × (我身31口) || コ11 || b b a ④ 五月 || 上 × × (火打7下14白) || コ11B || b d ⑤ 五歳 || 中

× × (清水55口) || コ11 || b b a (吳) ① 後生 || 上 × × (妓王83口) || コ11B || a c (吳) ⑧ 五萬 || 上 × ×

(火打7下17口) || コ12 || b b a (吳) ② 次男 || 上 × × (太宰府9下43白) || コ11A || a c (吳) ① 四方 || 上

× × (清水49口) || コ112B || a c (サエ) ① 世間 || 上 × × (二代34口) || コ11B || a c (サエ) ② 不便 ||

コ上 × × (紺搔9下149口) || コ11A || b a ① 謀反 || 中 × × (鱸17口) || コ1コ01A || a c (吳) ③ 京都 ||

上 × × (土佐坊1下103口) || コ11 ① 勝負 || 上 × × (那須1下72口) || コ11B || a b ④ 臣下 || 中 × × (鹿

谷12口) || コ11B || a b (漢) ② 大地 || 上 × × (法印8上58口) || コ11B || a b ④ 當時 || 上 × × (妓王

63口) || コ11B || a b ③ 天下 || 上 × × (二代36口) || コ11A || a b (漢) ⑤ 平家 || 上 × × (禿24口) || コ

11 || a b ① 崩御 || コ上 × × (飛脚8上174口) || コ11A || a c (漢) ① 法師 || 中 × × (清水54口) || コ1

1A || d b (サ) ⑤ 名馬 || 上 × × (生食1下32口) || コ11A || a b (漢) ⑥ 薬師 || 上 × × (願立140口) || コ

11B || d b (吳)

(二) 太鼓類 | 和語の兔類に準ずる | 平曲 ○●● または ○○○型

① 御前 || 中上 (殿上7口) || テ001 || a b (吳) ② 多勢 || 上 × × 上 (飛脚8上167口) || テ00A || a b

- ◎二代^{ニダイ} || × 中上 (二代 37口) || テ 0 1 || a b (呉) ④ 飛脚^{ヒキヤク} || × × 上 (火打 7 下 14 白) || テ 0 0 B || a f ⑥ 不覚^{フカク}
- || × × 上 (六代被斬 8 下 122 白) || テ 0 0 A || a f ⑦ 三種^{サンシュ} || × × 上 (戒文 8 下 62 口) || テ 0 0 || c b ⑧ 太鼓^{タイコ} || × × 上 (烽火 7 上 49 口) || テ 0 0 B || c b (漢) ⑨ 内裏^{ダイリ} || × × 中 (清水 50 口) || テ 0 1 0 A || c b (漢) ① 卒^{ソウ}
- 都婆^{トバ} || 中上上 (卒都婆 1 上 26 指) || テ 0 2 0 B || d b b (呉)
- (ホ) 最後類^{サイゴ} — 和語の兜類^{カブト}に準ずる — 平曲 ○ ● ○ 型
- ① 今度^{コンド} || × 中 × (殿下 104 口) || テ 2 1 B || c a (呉) ② 今夜^{コンヤ} || × 上 × (無文 1 上 51 口) || テ 2 1 B || c a (サ)
- ③ 最後^{サイゴ} || × 上 × (重衡 7 下 112 口) || テ 2 1 B || c a (サエ) ④ 三度^{サンド} || 中上 × (妓王 70 口) || テ 2 1 || c a (呉)
- ⑤ 三位^{サンミ} || × 上 × (若宮 10 上 115 口) || テ 2 1 || c a (呉) ⑥ 先途^{センド} || × 中 × (鶴川 124 口) || コ 1 テ 2 1 B || c a
- (呉) ⑦ 太夫^{タイフ} || × コ 上 × (落足 8 下 53 口) || コ 1 テ 2 1 A || c a (漢) ⑧ 丹後^{タシゴ} || × 上 × (主上都落 9 下 23 白) || テ 2 1 || c a (呉)
- ① 萬里^{マンリ} || × コ 上 × (維盛入水 7 下 57 口) || テ 2 1 B || c a ② 用意^{ヨウイ} || × 中 × (殿上 4 口) || テ 2 1 B || c a (フ)

(2) 表の説明

- (2・1) 右の表において、五枚^{ゴマイ} || 上上 コ 上 (橋合戦 8 上 108 口) などとあるのは、東大本の用例を示す。また、不足^{フソク} || 上上 中 (鹿谷 118 口) などとあるのは、教育大本の用例を示す。
- (2・2) 修行^{シュキヤウ} || コ 0 0 A B などとあるのは、現在諸方言アクセントである。最初のコ 0 が京都方言、次の 0 が東京方言、最後の A などが鹿児島方言 (修行は A 型と B 型とが並存) のアクセント型である。
- (2・2・1) 各方言アクセントの表記法及び資料の性格については、すべて、『国語学』55 集拙稿の場合に準ずる。
- (イ) 例えば、京都方言の「コ 0」は、高起式^{コウキ}無核型すなわち ● ● 型であり、また、「テ 2」は、低起式^{テイキ}第二核型すなわち、

アクセント史料として見た平曲譜本 (奥村)

○●○型を示す。

(H) 東京方言の「0」は、無核型すなわち○●●▽型であり、また、「3」は、第三核型すなわち○●●▽型を示す。

(ハ) 鹿児島方言の「A」は、終りから二拍めに核のある型―すなわち○●○〇〇▽型を示す。また、「B」は、最終拍に核のある型―すなわち○●○〇〇〇▽型である。

(2・3) 修行||bb(フエ) などとあるのは、各語に関するものとの声調(推定をふくむ)を掲げたものである。

(2・31) 我国の字音声調資料において、各漢字の左下・左上・右上・右下に声点の認められるものを、それぞれ、*a*・*b*・*c*・*d*と表記した。それぞれ、平・上・去・入と称するのが普通であるが、中国語における調類としての平・上・去・入とは、全く別の概念である。*f*は、いわゆる入声軽であり、*c*と*d*との中間に声点が付されている。

(2・32) 修行||bb(フエ)とある事により、△補忘記(フ)や、山家本法華経宗淵版(エ)における声調表記例「修行」の存在を知らしめるわけである。同様にして、(サ)は四座講式の声調表記例を示す。

(2・33) この場合、「ものとの声調」とは、つまり、それぞれの字音声調を意味する。(フ)や(エ)など、平曲譜本と同時に期もしくは以降の文献を以て、「ものとの声調」を推定するのも、決して不合理とは言えないわけである。

(2・34) 五枚||bb(呉)とあるのは、△「五枚」という語形自体の声調表記はないが、呉音系諸資料において、「五」及び「枚」がそれぞれ*b*声―いわゆる上声―として表記される事を示す。同様にして、(漢)は、漢音系資料における声調表記例を示す。

(2・4) それぞれの出自からすれば、△前記一度類を、和語の小豆類に準ずべきものと、頭類に準ずべきものとの二つに分ける事も、一おうは可能である。「儀式・供養・作法・一度・権威・妻子・上手・冥加」など大部分は頭類すなわち○●○型出自とみなされるが、「礼儀」はむしろ、小豆類すなわち○●○型出自と見るべきか。

ただし、この様な区別に関しては、なおいろいろな問題が残る。例えば、「気色・一事・一夜・浄土」等は、その出自からして一おう、頭類に準ずるもの様であるが、現在鹿児島方言ではむしろ、小豆類的なA型になっている。

(2・41) 同様にして、前記「世間」類を、△和語の二十才類に準ずる「去年〜五歳」などと、命類に類に準ずる「勝負〜棄

師」などに分つ事も、一おうは可能であろうか。

(3) 三拍以外の漢語についても、右と同様の分類整理が可能である。

(3・1) 以下、二拍漢語の一部に関するアクセント型分類作業の結果だけを示しておこう。作業の方法手続き等は、前記三拍語の場合と全く同様である。

- (イ) 徳類—和語の鳥類に準ずる—平曲●●型
 益 額 曲 直 徳 迎 法 礼 公家 袈裟 娑婆
- (ロ) 一類—和語の石類及び山類に準ずる—平曲●●型
 一 甲 京 金 功 業 損 塔 蝶 天 毒 鉢 罰 本 門 役
 用 龍 六 御所 思慮 弟子 武士 不慮 無二 文字 余所
- (ハ) 運類—和語の松類に準ずる—平曲○●型
 愛 運 恩 剣 堂 胴 文 王 後家

七 参 考 資 料

九州大学国文研究室蔵『平語』(卷一上 鱸4~5ペ)の例

